

レポート
「月姫」序章に見る認知言語
2002年8月12日
古守 久万

1-1. 外界認知と言葉の身体性

人間の言語は、外界の認知に自らの身体を基準とする様なものが多い。例えば軽重・動静・硬柔などがあげられる。言語には、外界の知覚と理解に関わる様々な認知のモードがある。特に場所・空間の認知プロセス、五感や身体感覚に関する認知プロセスは重要な意味を持っている。外部世界という客観的なものを、その中に埋め込まれ、しかし主体として存在する人間は、自分の感覚という主観的な視点によって捕らえているのである。特に今回は、我々の外界との相互作用に関わる主体の経験のドメインの一部である、五感について例を挙げる。

五感の経験のドメインの例は、次のようにあげられる。

- <視覚> 明・暗 黒・白・灰
- <触覚> 暖・冷 暑・寒
- <味覚> 甘 辛 苦 渋
- <聴覚> 騒 静
- <嗅覚> 臭

外界認知を通して得られる情報では、かなりの部分が五感に依存していると言ってよい。これらの比喩的拡張プロセスの代表例は、主に目、鼻、耳に多い。

1-2. メタファー

メタファーとは、あることを表現するのに、そのことを直接表現しないで他の何らかの関係のあるものを持ち出して表現する方法であり、また働きという心的な機能あるいは過程と、その過程の結果である表現そのものという2つの側面がある。

メタファーを日本語にすると比喩となり、これも同じく「説明や表現を印象深く(分かりやすく)するために、適当な類例や形容を用いること」(新明解国語辞典)とある。

メタファーには、比喩される言葉と比喩する言葉がある。

例:「暑さでバターが汗をかいている」

ここでは、「バター」が比喩される言葉で、「汗をかいている」が比喩する言葉である。更に比喩は、その両者を結びつける関係を表す言葉を含む。「暑さ」というのは両者を結びつける言葉である。これら3つは必ずしも全てが言葉として表現されているとは限らない。比喩される物や結びつける関係が表現されていない場合もある。

1-3. 共感覚

共感覚とは「ある五感の感覚を他の感覚に置き換えて表現する」メタファーの一技法だと言ってよい。ただしその感覚間での転用には制限があり、例えば視覚から嗅覚という方向の表現(暗い臭い等)は存在しない。例:やわらかな味(触覚→味覚)、甘い香り(味覚→嗅覚)、暗い音色(視覚→聴覚)(図1参照)

2. 月姫に見る各表現

ここでは「月姫」(著:奈須きのこ)という作品の序章に当たる部分を抜き出し、そこで使われている表現について例を挙げてみたい。

また、自分も物書きをしているので、そのような視点で興味がある様な表現には、その表現を使用した作者の認知的・心理的なプロセスも考えていきたい。

この序章は、冬、まだ小さかった主人公の家族が屋敷の庭で惨殺されるというシーンである。

まず最初に見られたのは

屋敷の庭はすごく広くて
まわりは深い深い森に囲まれて。
森の木々はくろく・くろく
大きなカーテンのようだった。

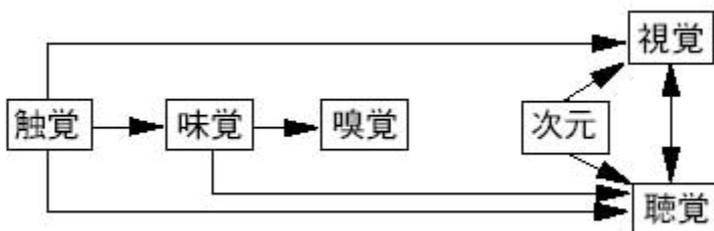


図1: 共感覚の方向性
(矢印は主に共感覚の発生するとされている方向)

という表現だ。

ここでは、まず「大きなカーテンのようだった」という部分に注目すると、「~のよう」というのは比喩を表す一般的な表現であるので、これがメタファーであることがわかる。

ここで先程の定義に当てはめると、比喩される言葉は「森の木々」であり、比喩する言葉は「大きなカーテン」である。また、両者を結びつける関係を持つ言葉は「すごく広くて」と考えられる。それは大きなカーテンという表現から、空間的な広がり大きく持たなくてはならないものが対象となっている筈であり、それが空間的広がりを持つ森の木々である、という事から想像される。

また、「くろく・くろく」という表現も少し気になるが、これは夜であるので、視覚的に本当に黒く写っていると考えられた為にメタファーでないと判断した。

次にとても興味深いのが

森はふかくて ツメタイヒカリも届かない。

という表現である。

これは比喩表現の中でも特に共感覚表現であると思われる。比喩される言葉はここには表現されていないが、月光と考えられ、比喩する言葉は「ツメタイヒカリ」となる。また、両者を結びつける関係を持つ言葉はここまでに表現されている「暗い夜・くらい」等の言葉と考えられる。

「冷たい光」という表現は、光の「強さ・明るさ」という視覚に関わる言葉を「ツメタイ」という触覚での言葉で表現している。これを共感覚の記法で表すと「触覚→視覚」となる。

この「ツメタイ」は恐らく、太陽光と違い月光が青白く弱い光であるという事を表現するための言葉であると考えられる。実際、月光は太陽光の数千分の一の光量しかないが、科学的根拠はこの表現にはあまり関係ないと考えられる。

3つ目に、2つの似通った表現をとりあげると

トマトみたいに あかい水。

目にあたたかい緋色が混ざってくる。

という表現だ。

これは、両者とも比喩される言葉が「血」である。それぞれ比喩する言葉は「トマトみたいに あかい水」「あたたかい緋色」となる。結びつける表現は血が出る要因である言葉、ここでは「かわりにバラバラにされてくれた」等を考えることが出来る。ここで表現上の効果とし

て、「血」という直接的な表現を避けることで詩的效果をより高めていると思われる。

しかし認知言語として同時に興味深いのは、この子供が「血」という存在を知らないと考えることである。仮にそうだと考えると、この表現は子供に未知の事象を提示して「これを何かの言葉で表現しなさい」と聞く実験に照らし合わせて考えることが出来る。

実際に血を知らない子供に対して実験を行うことは出来なかったが、上記の表現はその実験の一結果として考えられるのではないだろうか。ただし、「血」と「緋色」の言語習得関係を考えると緋色という言葉が先に習得されるのは難しいだろう。この主人公は古来から由緒ある家系の子息であるので、辛うじて伝統的な色彩表現を知っていた、と無理に曲解することも出来るが、これはあくまで修辞表現であるのでここでは無視する。

最後に、これは五感表現とは少し違うが、心的表現のメタファー

——なんて、ツメタイ——わるい、ユメ。

を考える。

これは「悪い夢」という心的内容の程度を、「ツメタイ」と触覚の表現で表していると考えられる。家族が惨殺されるという事を、非常に恐ろしい表現として「ツメタイ」と使ったのではないだろうか。更に前述の「ツメタイヒカリ」と呼応した表現とも考えられる。

単純に「酷い」、もしくは似た表現で「冷酷な」と使用するよりも、認知的に見るとより恐ろしい事象だと考えることが出来る。自分の感想として、「ツメタイヒカリ」を受けて考えると、より鋭さのある恐怖、突きつけるようなあまりにも残酷な現実感、を認知することが出来た。

3. まとめと考察

「月姫」という作品は、著者の言語観が非常に独特な造語や読みが目立つ。例えば「沈夢(しずむ)」「硝る軀(もえるからだ)」「昏い傷痕(くらいきずあと)」等である。これらの表現が我々の理解と認知のプロセスにどのような影響を与えているか、興味は尽きないが、作品が非常に長大(原稿5000枚分)な為、今回はその中で世界観を決定させるような序章を取り上げてみた。

自分も作品を書いている身として、作者がこのような表現に至った「発話のプロセス」に似た認知的思考を自主的に考えてみたいと思う。

参考資料：奈須きのこ 2000 月姫 TYPE-MOON